音の杜 OTOnoMORI

会報 Vol. 9 ● 2010.7.6 発行 ●

『先生、お誕生日おめでとうございます！』

大谷 惠美

いつも扇子を持ち歩き、どこぞの広告の印刷された団扇を離さず、外から戻るとまずは大きなクーラーの前で冷たい風を全身に浴びようと、ふんぞり返って両腕を広げ、しばし無言で冷気に体を晒していらした先生。豪快な暑がりだった先生が、7月24日のお誕生日に届くプレゼントの数々を開く時には、いそいそと神妙な幼い男児のようになり、中からオシャレな装身グッズなどが出てくるなり、「こりゃなんだ！？」と戯けて体のあちこちに合わせ、スタッフ皆に見せたりして、恥ずかしさをわざと隠す素振りがまた笑え、それですぐにまた箱にクシャクシャっと仕舞ってしまう。「いただいた方と会われる時には、必ず身につけてくださいよ！」などと女性陣から厳しく言われ、そそくさと室内どこかのロッカーにしまってしまうのです。

先生亡き後、当時の研究室を引っ越す時、あちこちのロッカーにハンカチやらポケットチーフやらシャツ、マフラー等々先生宛のプレゼントが書類にまみれて入っていたのを可笑しく思い出します。恥ずかしいとシュワシュワっとどこかへ隠すなんてねずみみたい！と思ったものです。そう、先生はねずみ年でした･･･。本当に幅広い年齢層の女性にモテた先生。夏は、佐藤先生を思い出すのが楽しい季節です。

さて、今年度から3カ年で音の杜の活動は休止することになりましたが、残り3年の取り組みを以下のようにはじめています。

① 2011年9月3日（土）に、東京オペラシティリサイタルホールにて、佐藤敏直作品演奏会の開催を決定。

②上記演奏会までに、ピアノ作品のレコーディング及び、CD発売を予定。

③ 2012年に、生前に書かれた文章をまとめた「作曲家佐藤敏直のことば」（仮題）の出版決定。

上記①では、邦楽作品とピアノ作品をお聴きいただきたいと思います。是非今からご予定ください。②は、子供のための作品集からCDを1枚、また予算が許せばさらにもう1枚を計画に組入れたい思っています。どうぞ皆さまご協力ください。そして③ですが、現在生前に佐藤先生の書かれた文章の収集作業に入っています。会員の皆さま方にも広くご協力をお願いしたいと思います。お手元に佐藤敏直の残された文章をお持ちの方は、是非事務局までお知らせください。雑誌への執筆や講演、対談や小さなコメントなども含めて、先生の残したことばを収集し、その中から選りすぐりの言葉の束を一冊の書籍として完成させる予定です。多くの文章の中から一冊の本にまとめる選別作業と編集作業をお手伝いくださる方がありましたら、是非ご協力をお願いします。こちらについても事務局へご連絡いただけますと助かります。どうぞよろしくお願いいたします。

今回会報へご寄稿くださいましたのは、会員の中から藤岡知夫さん、溝口春江さん、篠田弘子さんのお三方です。いただいた文章を読みながら、佐藤敏直という人物の多様性についてまた再びさまざまに興味が湧きました。先生を懐かしいとか思い出深いとかそうした過去形の言葉で思うのでなく、やはり今また先生という人物を色々な側面からもっと覗いてみたい、話してみたい、触れてみたいと思わされます。

藤岡知夫さんは大学時代のクラスメイト。私などは知る由もない学生時代の鋭く尖った「敏直君」をよく観察され、工学部の学生でありながら音楽によって結ばれていたその熱く強い友情の妙に、一本の映画を観るような思いで読ませていただきました。藤岡さんご自身の音楽への造詣の深さはもとより、今では国際的にも大活躍の指揮者である息子さんを育てられたことも含めて、生前よく「藤岡は面白いヤツだ！」と聞かされたものでした。

溝口春江さんは、長いことカワイ音楽教室静岡支部の指導者たちをとりまとめ、指導的なお立場で音楽教育、人材育成の陣頭指揮をとっていらした大ベテラン。佐藤先生にとっては、カワイ音楽教室という組織の中で音楽教育の思想を語り合える最も信頼を寄せていた大切な同士であった方。お二人の間に交わされていたやわらかな交流の姿を、今回は特別にお見せいただきました。先生の文字を見れば、多くの皆さんがその声や顔つきやそこに立っていらっしゃる温かさを感じるに違いありません。

そして篠田弘子さん。建築家である篠田さんを先生はやはり芸術家同士、同胞のように思っていらしたのだと思います。ご本人はもとより、映画監督のお兄様やデザイナーのお姉様の存在ごと篠田さんを好きでいらしたし、清瀬先生ご一家とひとまとまりの芸術における家族のような存在であったのだと思うのです。モノつくりの世界を共有していた弘子さんには、編集長をしていた「あんさんぶる」に連載を頼むほどの惚れ込みようでした。今回、文中にもある日本建築家協会での先生の講演テープを起こした資料も一緒にご提供いただきました。この貴重な講演内容も、何らかの形で残せる手だてがないかと思案中です。

お忙しい中、思いの深い文章をお寄せいただいた三名の方々、本当にありがとうございました。素晴らしいお誕生日プレゼントになりました！先生はきっとまた、恥ずかしそうにそっと開いていそいそ読むに違いありません。

先生のお誕生日翌日の来る7月25日、玲子夫人の指導される混声合唱団南生田コーラス30周年記念演奏会が開催されます。この合唱団が混声合唱組曲として初演した「猛獣篇」の楽譜も、つい先日カワイ出版から発売され、この日再演されます。別紙でご案内しています。是非お出かけください。

慶應義塾大学工学部に於る佐藤敏直君

藤岡 知夫（財団法人応用光学研究所理事長）

作曲家佐藤敏直君が音楽学校の卒業生でないことを知っている人は少なくないと思うが、どこの大学出身者かを知っている人は余りいないのではないかと思う。

敏直君は昭和31年(1956)、慶應義塾大学工学部(現在の理工学部)に入学し、5年間在学し、昭和36年3月立派に同大学を卒業し、工学士としての卒業証書を手にしている。私は昭和31年に佐藤敏直君といっしょに入学した同期生で、1年の時のクラスは異なっていたため、彼とつき合うことはなかったが、2年で専門課程、電気工学科に進んだときに、敏直君と同じクラスとなり、互いに趣味がクラシック音楽だということを知り合ってからは、急速に親しくなった。

彼は思ったことは何でも言うので、口数は多く、正義感の強い人情家でもあったが、私とは色々な問題でよく議論した。私は昭和35年に卒業したが、引き続き大学院修士課程に進んだために、彼が卒業する昭和36年まで一緒に慶應義塾大学でクラスメートとして過ごし、その後も敏直君作曲の発表会などには全て参加したし、亡くなるまで良き友人として過ごしてきた。

大学2年生の時に敏直君と親しくなったきっかけは、ドイツ語の時間に先生が音楽好きで音楽の話を始めたのはよかったのであるが、ジャズは音楽ではないと言ったので、敏直君が猛反発し、ジャズも立派な音楽である。ただし西洋音楽と違い、リズムがより主体性を持っていることと、メロディが違うのはアフリカ系と東洋系、ヨーロッパ系全て言葉が違うのと同じで、文化の違いによるものであって、お互いに異なった文化を理解するのと同じであると言って論戦になり、その時間はドイツ語の授業そっちのけで、音楽や文化の話に一時間を費やしたことを懐かしく思い出す。

私はその当時、ピアノとチェロと二つの楽器を先生についてレッスンを受けており、相当な音楽ファンではあったのであるが、佐藤敏直君の場合には私のような演奏を聴く音楽ファンではなく、自分で作曲をしているというので、吃驚仰天した。というのも、その頃現代音楽を聴く機会は私も時たまあったのであるが、これらは私の理解を超えていて、私が愛するクラシック音楽とは全く違う分野の音であって、現代音楽を作曲するような人間は、我々とは別種の人種で、食い物や好みも違うのではないかと考えていたのである。

ところが敏直君は我々と同じに蕎麦やラーメンも食べるし、ものの考えはちょっとおかしいと思うところはあったものの、基本的には我々と余り変わらないようであったし会って話していても楽しい男で、我々の仲間に完全になりきっていたのである。

その後我々の同級生の龍野剛一君が敏直君や私に感化されて音楽好きになり、新たにピアノを買って習い始めることになった。そしてそのピアノ開きの日に彼の家に集まった。その時私は敏直君に是非即興演奏をやってくれないかと頼んだのである。モーツアルトがよく即興で演奏したという話は聞いていたが、現在の作曲家に即興演奏が出来るかどうか疑問に思っていたのであるが、もしかしたら出来るかも知れないと思い、半信半疑で頼んでみたのである。彼は「即興演奏か、それでは何かテーマがないと」、などと言ってピアノの前で我々と喋りながら何かぽつりぽつりと音をならしていたが、「あ、これは使えるかも知れない」と言って、暫く、数分くらいであったろうか、ピアノの前で音を出しながら考え込んでいたが、「それではやってみるか」と言って弾き始めたのである。そして正に即興演奏で、見事に一つの完成された曲を、私の感性でも十分理解できる誠に見事な曲を5分程度であったが、弾き切ったのである。その時、確かに佐藤敏直は作曲でメシを食おうという意志を持つだけの能力と、それを支える感性も技術も持ち合わせた人間で、我々とはまるで違った世界の人間であることを、私も



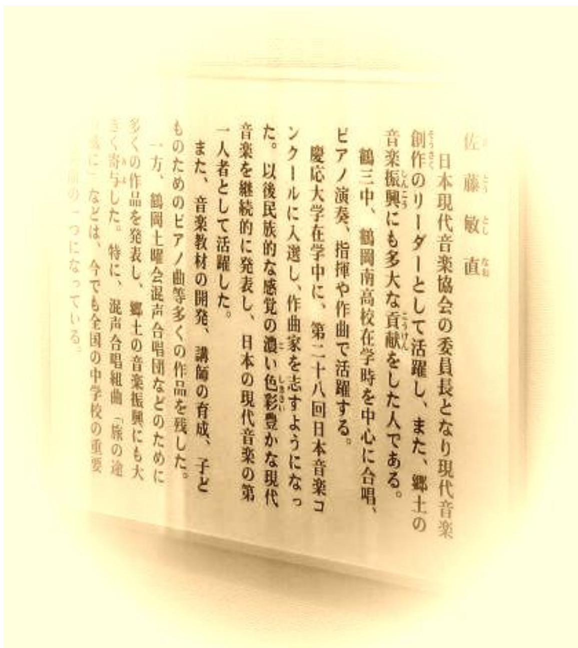
認識したのである。

しかも彼の持っている音楽が私が感じていた現代音楽とはかなり外れて、我々の感性に近いものであることを知ってますます敏直君に対する親近感を増すようになった。

大学３年の時であったか、彼は日本音楽コンクール（NHK,毎日新聞主催）の作曲部門に応募すると公言して大学にも顔を出さない日が多くなり、作曲に集中していたようである。私は即興演奏で彼の才能を垣間見る機会があったので、当然彼は優勝するだろうと期待を持って楽しみにしていたのであるが、結果は残念ながら第4位で、優勝は逸してしまったようである。しかし作曲の審査など全く主観の世界である。彼が作曲で指導を受けていた先生は、清瀬保二氏だったと思うが、その関係も色々あるのであろう。敏直君自身は4位という結果には納得いかなかったようで、悩んでいたようであるが、自分が作曲家になるという意志は曲げずに突っ走って行った。

しかしここで強調しなければならないことは、彼は慶應義塾大学工学部電気工学科の学生としての道も全うしたことである.。作曲コンクールに応募した３年時は講義をだいぶ休んだり、勉強を犠牲にしたために、一年留年することとなって、卒業に５年かかったが、昭和 36 年には半導体に関する卒業論文も見事に完成し遂げて、慶應義塾大学理工学部を無事に卒業したのである。 卒業した後は、私も彼の作品の発表会に出かけて行く程度しか会う機会がなく、親しい付き合いをすることはなかったが、彼は苟も慶應義塾大学電気工学科の卒業生であるから、電子関係のメーカーなどに就職して、そこの碌を噛みながら作曲活動を続けることも可能であったが、エレクトロニクスは、それを学んだ経験を自分の作曲に生かすことだけに留めたのである。

作曲家として音楽一本で人生を突き進み、幾つもの作品をこの世に残したとは言え、早世してしまったのは誠に残念である。私達、大学の同級生の心の中には、我々と一緒に電子工学の道を歩みながら音楽に一生を捧げた快男児として、爽やかな思い出だけを心の中に残してくれた。


佐藤敏直
日本現代音楽協会の委員長となり現代音楽創作のリーダーとして活躍し、また、郷土の音楽振興にも多大な貢献をした人である。
鶴三中、鶴岡南高校在学時を中心に合唱、ピアノ演奏、指揮や作曲で活躍する。
慶応大学在学中に、第二十八回日本音楽コンクールに入選し、作曲家を志すようになった。以後民族的な感覚の濃い色彩豊かな現代音楽を継続的に発表し、日本の現代音楽の第一人者として活躍した。
また、音楽教材の開発、講師の育成、子どものためのピアノ曲等多くの作品を残した。
一方、鶴岡土曜会混声合唱団などのために多くの作品を発表し、郷土の音楽振興にも大きく寄与した。特に、混声合唱組曲「旅の途に」などは、今でも全国の中学校の重要曲の一つになっている。

「曳馬萩筆」に想う

溝口　春江（元カワイ音楽教室静岡支部指導主事）

あの頃、私の住む浜松市の郊外、三方原台地に連なるこの地には、萩の花が群生していた。秋になると萩の花が咲きこぼれ赤松の林には、しだやすすきの脇に赤紫の可憐な花が風に揺れていた。その事に由来してこの地は萩丘と名付けられたと言う。この萩の花は古く万葉集にも歌われ家の近くの公園に歌碑がある。

引馬野に　におう榛原（はぎはら）入り乱れ　衣におわせ旅のしるしに

奥麻呂　（万葉集一巻　57）

この歌は持統上皇が三河に行幸と聞いた奥麻呂が、引馬野に上皇をお迎えし、旅の土産に一首を献上した時の歌、と記されている。

その萩の枝を小筆の柄にした「曳馬萩筆」が工芸品として売られていた。その柄のまがり具合が手になじんでなんとも心地よく、私は連雀町にあった文明堂でよく買い求めていた。萩筆を造られていた背の高い品の良いご主人からも店先でその由良を聞いたこともあった。

あるとき、佐藤敏直先生はきっとこんなものもお好きかもしれないと遠州森町にある手漉きの和紙をセットにして贈ったことがあった。

佐藤先生の書かれるお手紙は、いつも太い万年筆であったが、その筆跡の流れるような美しさ、力強さが先生の風貌をそのまま文字にしたようで存在感があった。佐藤先生が毛筆で書かれたらどんなにかすばらしいと想像してプレゼントしたのだった。

驚いたことに早速先生から毛筆のすばらしいお手紙をいただいた。

先生はやっぱり「書」にも関心がおありなんだと勝手に想像した私のカンもまんざらではなかったと微笑んだものだ。

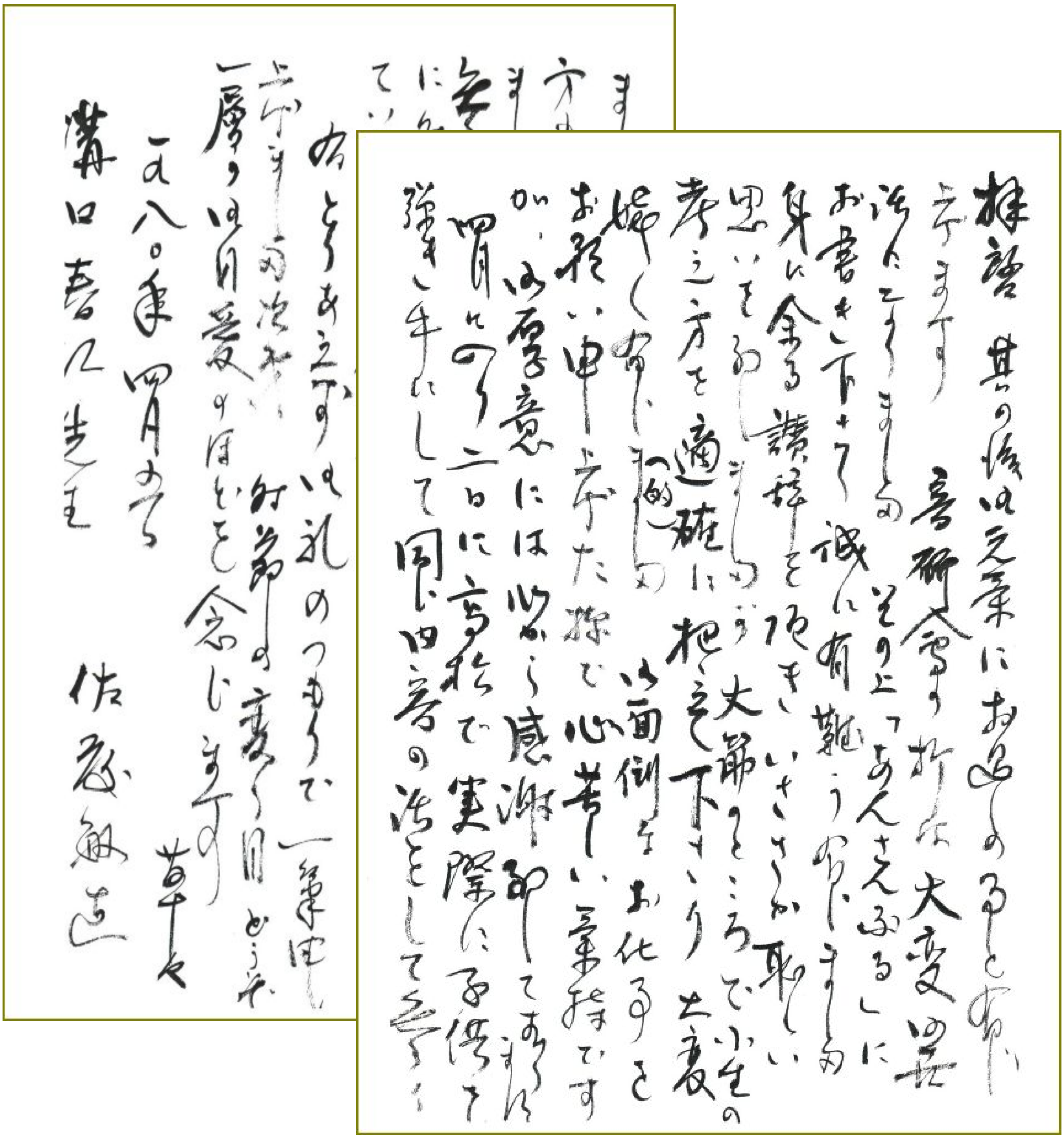
そのお手紙は今も大切にして手元にある。わさび色の和紙に綴られた力強い毛筆の文字はそれは伸びやかで、骨力があり、なんとも暖かい。あの先生の端正で知性に溢れたお顔や、豊かな内面が文字にも溢れていて趣がある。その気骨のすばらしさに魅入りながら、私は今でもつくづく思い返し眺めることがある。

時は移り、「曳馬萩筆」を造られていた文明堂のご主人もこの世を去り、あの懐かしい店もたたんでしまわれたあの通りに面影はなにも残っていない。

萩の花が咲きこぼれていた我が家の周辺も、ところ狭しと家が建ち並び、道ばたに萩の花を見かけることはできなくなった。

佐藤先生も、思いがけずも急逝され、あの懐かしいお顔や声に接することはもはやできなくなってしまった。

わたしは、先生のあの萩筆で書かれたすばらしい文字を眺めながら、先生の豊かだった心のうちを見る思いで遺されたお手紙を読み返している。



拝啓　其の後はお元気におすごしのことと思い存じます　音楽会の折は大変失礼致しました　その上「あんさんぶる」にお書き下さって誠に有難うございました　身に余る讃辞を頂きいささか恥しい思いを致しましたが大筋のところで小生の考え方を適確に把えて下さり大変嬉しく存じました　ご面倒をおかけすることをお願い申し上げた次第で心苦しい事様ですが、ご厚意には心から感謝しております　四月の二日に高校で実際に子供たち（弾き手にして）開いた音の流をして……

……とありますが　礼のつもりで一筆申し上げます　……節の変わり目どうぞ一層のご自愛のほどを念じます

草々

四月十日

佐藤敏直

溝口春乃先生

わさび色の和紙に書かれたお手紙。私はこのお手紙のこの字が大好きです。（溝口）



この薔薇の絵は佐藤敏直先生が描かれたものです。

『佐藤敏直さんのこと』

篠田 弘子（建築家）

私と小山内さんや清瀬永氏との間では「びんちょくさん」と陰でお呼びするのが、慣わしでした。

小山内さんは、河合楽器の機関紙あんさんぶるの編集者であり、清瀬永氏は敏直氏の作曲家としての師、清瀬保二氏のご次男、建築家で私のボスでした。しかしこのお２人と知り合いになったのは、私はたまたま清瀬建築設計事務所というところに就職したら、ボスの父上が作曲家清瀬保二であって、あんさんぶるの小山内さんを知ったのは、共通の知人の詩人を介してでまったくの偶然でした。

「びんちょくさん」と特に親しくさせていただくようになったのは清瀬保二氏の葬儀のときからでした。

突然亡くなられたため、永氏（以後ボス）は、所員を動員して関係諸氏に連絡をとり、早速通夜葬儀の準備に入らざるをえませんでした。そこで、わが清瀬建築設計事務所の所員が裏方を買って出て、作曲家のお弟子さん側の「代表幹事？」がびんちょくさんであったことから、段取り打合せでお親しくなった次第です。ご自宅での通夜に弔問客があふれかえり、ほんとうにてんてこ舞いでした。そのとき、武満徹氏や、黛敏郎氏など思想的なものを超えた方々が現れ作曲家清瀬保二氏の「偉大」さを思い知りました。

わがボスによれば、その弟子として、作曲家佐藤敏直は清瀬保二の作曲思想（と言って良いかどうか今は自信がありません）を受け継ぐものとして、最も高い存在である　ということでした。以後、機会がある度にさまざまな現代音楽のコンサートに出かけ、お知り合いになった小山内さんや、私の姉と、時にはボスを交え、いっぱい飲みながら遠慮の無い「音楽評論」を戦わせ、大笑いしたりするのが何よりの楽しみになりました。びんちょくさんも大分くしゃみをされたことと思います。

清瀬保二の曲がそうであったように佐藤敏直の曲は基本的に明るく、日本現代音楽の「ネクラ」を吹き飛ばしてというか、暗い曲でもその奥底に「あかるい音楽」が見える気がしたものです。そのお人柄はもっと率直で口が悪く、皮肉屋の私を大いに楽しませてくださいました。

特に私達が所属する日本建築家協会が定例的に開いている「トーク」という文化講演会に講師をお願いしたことがあります。その記録を今読み返してみているのですが、ピアノを弾きながら「人にいいなと思わせることに長けた、小憎らしいほどうまい商売人　ベートーベン」などと聴衆を笑わせ、バッハやモーツアルト、ドビュッシーに至るそれぞれの作曲家の　どこが、なぜ、そのように感じさせられるのか、音を出しながらその理由を分析してみせる腕前？に圧倒されました。そして「最も西欧的なバッハと一番かけ離れたところに清瀬保二がいる」との見解に驚かされ、ご自身作曲の清瀬保二追悼コンサートのための「レクイエム・哀歌」の作曲技法についてテープを流したり、逐一ピアノで音を出しながら詳しく解説されました。

「しかし鑑賞者としては、メインのメロディーだけでなく下に流れている音、隠れ潜む音を意識するともっと音楽が楽しくなる」とのやさしい教えを、私は改めて守ってゆきたいと思います。

作曲と建築、それぞれ物を作る立場の、共通点と大きな違いを確認できる、ものすごく面白いイベントでした。

私の中のびんちょくさんは、あの大きな体で、いたずらっぽくからかうように「超」現代音楽を弾いて見せてくださっています。

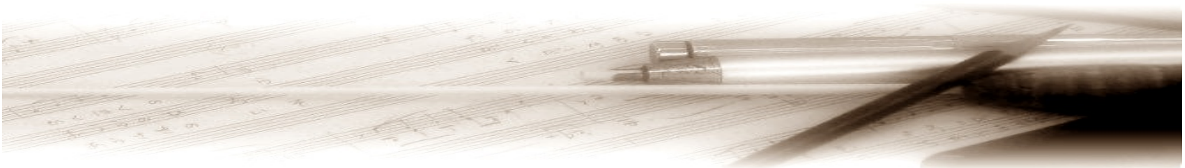


佐藤敏直先生の生前の業績や資料が展示されている大寳館（鶴岡市）

びんちょくごろく 敏直語録

No. 7

作曲作品ではなく、「佐藤敏直の文章のファンだった」という人は意外に多い。
先生の言葉には不思議な魅力がある。どの文章からも、厳しさと強さを支える深い優しさをみるように思う。ファンだったという誰もが、先生のそのとてつもない優しさに触れたくて、文章を何度も読んでは心に言葉をそっと置いて、大切にしまっているに違いない。
敏直語録では、佐藤敏直の「ことば」のきれはしや、鋭い「独り言」、また「散文」や「随筆」、音楽や教育への提言、編集長として毎月書かれていた「編集後記」等々、毎号少しずつ紹介いたします。
今回は、1989年10月の「ムジカノーヴァ」（音楽之友社）に寄稿された文章を取り上げてみました。



『“西洋”から入り いま求める“非西洋”の響き』
なつかしき亡き父とのコミュニケーション

気がつくと、ピアノがすでに在った。父の書斎兼応接間。当時流行っていた赤い屋根のある「文化住宅」風な世田ヶ谷の家であった。
いつ頃からキイに触れて音を出すようになったのか記憶にない。ヴァイオリンの方が得意だった父が大きな手で『ドナウ河の漣』や『波濤を越えて』を弾いていたことや、少し酒が入ってご機嫌のとき自作のマーチを得意気に演奏していたことを想い出す。
多分そんなことを見様見真似でピアノに親しむようになったのだろうが、喧嘩に負けても、母に叱られてもヤマハのアップライトだけは私にいつも優しかった。
父愛蔵の名曲のレコードや、下宿していた大学生が置いていったというジャズも、手巻きゼンマイのポータブル蓄音機でずいぶんと聴いたが、ピアノで音を探っている時ほど恍惚だったかどうか。
五歳頃、一日中かつて誰も聴いたことのない音楽を繰り返し弾くのを聴きつけた父が、再び三度それを弾かせて採譜してくれたことがある。「これは敏直が作曲したものだ」と母に言って、また幾度も弾かせた。しかしその楽譜は今は無い。あれば、亡き父の若い時分の、私とのコミュニケーションの記録になっただろうに、残念である。確か、六拍子で伴奏は分散和音だった。
大判のバイエルをさげて幼稚園の先生のところに通うようになったのはこの前後だろう。道すがら悪餓鬼の集団がいて、女の如くピアノをやっていることを嘲笑し、囃したてた。軍国主義一色に染まってゆく頃であった。
だがバイエルは一向に上達しなかった。ピアノに向かうといつも新しい伴奏に熱中したからだ。メロディを選んでは次々と異なる伴奏を付けた。分からなくなると父に教わった。特にⅡの和音を含むカデンツにとりつかれて興奮したのはこの頃のはずである。四六の和音への一連の流れは私を虜にして離さなかったのだから、ご多分に漏れず、私も西洋音楽の和音システムから音楽の道に入ったことになる。
しかし作曲するようになった今日、その頃もしもっと日本の伝統音楽や、非西洋の響きに触れる機会に恵まれていたら、カデンツなどで満足せず、きっとより多彩に心のファンタジーを拡げることが出来たに違いない。と思うことしきりである。そうした音との出会いは、ずっと後になってからであった。
この確信は、いま子ども達に贈るピアノ曲を書く私の、基本的な姿勢である。

（ムジカノーヴァ 1989.10.30 発行 より）

敏直語録募集！

★ 出版物発行のために敏直語録の材料を集めます。

お手元に、「佐藤先生のこんな文章があります！」という方は、事務局までお送りください。

メールでもコピーの FAX でも形態はなんでも構いません。

編集人募集！

★ 出版物発行のために編集人を募集します。

多くの敏直語録の種分けや、敏直関連記事からの言葉の選別をはじめ、出版物発行までの編集作業をお手伝いくださる方がありましたら、ぜひご協力ください。

経験ありの方、大歓迎です！

スタッフからの一言メッセージ！

今回ご寄稿くださった三人の皆さんとのやり取りを通して、久しぶりに先生の声が聞こえた日々。

工学専攻の雄弁な若者の声。ぼくは教育者じゃないからと言いながら、「こどもに本物の音楽を」と熱く語っていらした声。魂の揺さぶられること以外には興味がない、という清瀬先生が大好きで、清瀬ファミリーのモノつくり人との交流を楽しんでいらした声。それぞれ違う顔で、それぞれ違う声。そのどれもが先生の本質だったんだ。

改めて幸せに思う。先生に会えて。

大谷 恵美

鶴ヶ岡城址（鶴岡市）に、大寶館という美しい洋風の建物があります。ここには、明治から平成まで、様々な分野で活躍された鶴岡市ゆかりの故人の資料が展示されています。

資料館の一角には、先生の遺品などが展示されているコーナーがあり、この前に立つとお会いしたことのない先生といつでもお話ができるような気持になってしまいます。

鶴岡にお越しの際は、ぜひ先生に会いにお立ち寄りください。この 4 月には、大寶館に隣接して「藤沢周平記念館」もオープンしました。

山澤 昭彦

雨音が好きです。雨に濡れた紫陽花の花が好きです。でも、雨の合間の日差しが心を優しくしてくれてます。

総理大臣の交代、参院選の公示、ワールドカップ、はやぶさの帰還と日本中が慌ただしく動いている中、先生の「地球のうえに」を歌うと安らぎを感じ、何かを語りかけてくれてる気がします。

いつまでも敏直先生の多くの作品が歌い継がれ、演奏されることを願っています。

宮嶋 良子

敏直先生は楽譜の出版を、ご自身で進んでされなかったとお聞きしています。作曲後20年経ち、ようやく混声合唱組曲「猛獣篇」が出版され、音の杜の作品一覧にもリストアップされました。楽譜が一人でも多くの方々の手に触れていただけたらいいなと思っています。

条谷 慶江

またまた 15 年前、敏直先生のおられた研究所にて。「先生、サインください。」と私が言いますと、先生は「やだよ。おかしなやつだなあ。」と当然のことながら取り合ってくださいませんでした。

それから数年後、私が、そのお仕事場から去ることになった日、先生は「これ、あげる。産まれてくるお子さんと聞いて。」と、『ちいさなパレット』の CD をくださいました。中には先生の素敵なサインがありました。今こどもは、『ちいさなパレット』の曲が弾けるようになりました。

瀧澤 かおり

● 音の杜 ～佐藤敏直プロジェクト～ 会報誌 Vol. 9 2010 年 7 月 6 日発行
● スタッフ：大谷恵美（代表）／条谷慶江／瀧澤かおり／宮嶋良子／山澤昭彦／
● 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 （財）東方学会 41 号室 tel. 03-3239-1906 fax. 03-3239-1907
e-mail：otonomori@otonomori.com http：//www.otonomori.com